調査報告　三

常磐松文庫蔵『宗安小歌集』（異本）一冊

担当者　竹本幹夫

一　はじめに

本学常磐松文庫蔵『宗安小歌集』（異本）の全文を影印・翻刻する。『宗安小歌集』は、中世末期から近世初頭の間に流布した小歌の集成として、昭和六年九月、笹野堅氏により同氏所蔵の巻子本が『室町時代小哥集』と題して影印・翻刻されたが、現在のところその原本は所在不明である。この本は、久我有庵三休なる人物が、宗安老（沙弥宗安）なる人物の依頼によって序文を付し、かつ奥書を加えたものであり、宗安はその小歌集の編者であることが、序及び奥書の内容から確実視される。所収歌数は数え方により二二〇首又は二二一首とされ、書写年代については諸説があって一定しないが、室町末期以後江戸初期以前の間に想定する立場が一般的といってよかろう。その成立・書写年代を厳密に限定できぬこともあって、『室町時代小哥集』は後に『宗安小歌集』とも便宜的に別称され、後者の呼称が現在では一般化したが、本来は無題の書である。今仮に笹野氏の影印本『室町時代小哥集』（万葉閣刊）を、笹野本と略称しよう。又、笹野本及び本学常磐松文庫本を包括する作品名として、『宗安小歌集』の名を用いることとしよう。

『宗安小歌集』の編者宗安や笹野本奥書に名の見える久我有庵についても、現在までのところ必ずしも一致した見解を見るにいたってはいないが、いずれにせよ本書が、『閑吟集』と『隆達小歌』との間にあって、小歌の過渡的形態を伝える好資料であることに変りはあるまい。笹野本は浅野建二氏『室町時代小歌集』（新註国文学叢書）・北川忠彦氏「宗安小歌集私註（上）（中）（下）」（『論究日本文学』第26・27・28号）・小笠原恭子氏「『宗安小歌集』私解㈠㈡㈢」（『武蔵大学人文学会雑誌』第八巻4号・九巻12号・十巻23号。未完）等によって、関連歌謡との比較研究が推進されたが、原本自体の所在が不明であることや、異本の存在

を聞かぬ孤本であったという事情のため、笹野本自体の性格把握においてすら、なお不明確な点が少なくないように思われる。本稿に紹介する常磐松文庫蔵の異本は、笹野本の二二一首に対してわずかに十九首（うち一首重出）しか収めぬものではあるが、右の事情に鑑み、その存在はきわめて貴重である。以下、該本の書誌や笹野本との校異を示してその性格等を論じ、さらにその全文を影印・翻刻する。

二　書　誌

本学常磐松文庫蔵。写本。一冊。縦246㎜・横180㎜の美濃本。列帖装。地紋磨り出し紺色表紙。表紙裏打は金梨打地料紙。綴じ糸緑。料紙鳥の子（布目入り・一部色替り）。全十七丁、うち墨付十二丁。冒頭にあそび紙一丁、墨付第10丁の次に白紙一丁、末尾にあそび紙三丁。墨付第7丁裏は藍色で紗綾型模様が部分的に刷られ、同じく第4丁表・5丁裏（一連の料紙片面の半折分）は黄色に彩色され、墨付第10丁の次の白紙（第11丁として数える）とそれと一連の最末のあそび紙とは、小豆色がかった色替り料紙である。虫損が多少あるが大体は補修済みである。題簽・外題・内題等はなく、奥書等もない。後補の帙（鶯色布張り）の上面左肩に「宗安小歌集」と別筆で記した長形題簽がある。書式は、墨付第1丁表より第10丁裏まで、第10丁表を除き、一頁につき小歌一首を散らし書きにし、第10丁表のみは何も書かれてはいない。全十九首で、うち墨付第7丁表裏の小歌が重複する。第11丁に小豆色の白紙一丁を置き、第12丁表より第13丁裏4行目まで、笹野本『宗安小歌集』序文の後半に相当する部分を、片面六行書きで記す。全文一筆で、とくに小歌の分は散らし書きという視覚的効果をねらった書式をとるが、全体の印象としては、麗筆とはいいがたい癖の強い筆跡であり、崩し方や字形などにも無理な点が少なくない。書写者・伝来等は不明ながら、装丁や書風の印象から、江戸前期以前の写本と見てさしつかえあるまい。墨付最終丁（第13丁裏）の奥に、「常磐松文庫印」「実践女子大学図書館印」の縦長の朱印二種を押す。前者の空欄に「七四一〇一」の番号をも記入する。

該本は、笹野本『宗安小歌集』序文の後半に相当する文章を付載し、全十九首のすべてが笹野本所収歌謡と重複し、かつ、『宗安小歌集』に独自とされる歌謡がその過半を占めるなどのことから、『宗安小歌集』の一異本であると断言できる。しかしながら〝序〟の位置と分量、及び各小歌の配列のあり方などは笹野本と大異し、又、笹野本との間に校合可能な程度の異文をも有する。該本自体の誤写の例は稀れであり、錯簡や落丁の可能性も想定しがたい。これらのことは、該本が笹野本からの抄写本であるとの

想像を拒否するものであり、該本が『宗安小歌集』の研究上少なからざる価値を有することを示唆するのである。

三　笹野本との校異

常磐松文庫本の全文と、笹野本の当該個処との、草仮名字母の文字遣の相違を除く校異を掲げる。校異は常磐松文庫本――笹野本という形で掲げ、通し番号を付す。小歌の部分はその全文と墨付丁数（1オ・1ウなどと表記）、該当する笹野本の歌番号（本稿第一章に掲げた浅野氏校注本による）を示し、〃序〃の部分は常磐松文庫本の丁数のみを掲げる。

【いとゝ名のたつ不破の関なむそ嵐のそよ〳〵と】1オ――51番歌
(1)名―な　(2)不破の関―ふわのせき　(3)なむそ―なんそ
＊『宗安小歌集』に独自の歌謡。次歌とともに恋の浮名が主題。

【雲の上まて浪のはてまてとてもたつ名に】1ウ――42番歌
(4)雲の上―雲のはて　(5)浪のはて―波の底
＊(4)(5)はどちらが原形とも即断はできないが、「立つ名」との関連からは、常磐松文庫本の形の方がよりふさわしい。これも本書に独自の歌謡。

【木ハた山路に行暮て月をふし見の草枕】2オ――32番歌
(6)木ハた―木幡　(7)ふし見―ふしみ　(8)草枕―くさまくら
＊小笠原氏は旅寝の歌とされつつも恋の気分のあることをも指摘される（「私解」㈡）。該本の場合、女のもとに通う男のイメージをもあえて重ねあわせれば、次歌と対になる構成かとも思われるが、一首の内容にはそこまでの具体性はない。

【なか〳〵の竹のませ垣ゆひそめてをり〳〵人の恋しかるらむ】2ウ――26番歌
(9)なか〳〵―中〳〵　(10)ゆひ―ゆい　(11)をり〳〵―おり〳〵　(12)らむ―らん
＊待つ恋を主題とする。以下の五首は本書独自の歌謡。

【夢よ〳〵あふとなみせそ夢はさむるに】3オ――27番歌
(13)あふ―逢

＊次歌とともに叶わぬ恋を主題とする。

【神も六借と覚す覧叶ぬ恋を祈れは】3ウ――2番歌

(14)神も―かミ　(15)六借と―むつかしく　(16)覚す覧―おほすらん　(17)叶ぬ―かなハぬ　(18)祈れは―いのれは

＊(14)は常磐松文庫本・笹野本どちらでも意味は通るが、神ですら成就させがたい恋を歌ったものであるから、「神も」とある常磐松文庫本の方に文脈上の整合性がある。(15)はどちらか一方が誤写かとも疑われるが、どちらが原形か判断不能。

【恨つくれはうらみなひ中もうらみらるゝ恨つけしのうら〳〵みよの】4オ――6番歌

(19)恨―うらみ　(20)なひ―ない　(21)恨つけし―うらミつけし

＊常磐松文庫本、「中」字を抹消上書。原文判読不能。以下三首は恋の恨みを主題とする小歌がならぶ。

【しの田のもりようらみ葛の葉】4ウ――18番歌

(22)しの田―しのた　(23)もりよ―森の　(24)葛の葉―くすのは

＊伝承歌「恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信田の森の恨み葛の葉」の下句と同型（北川氏「私註」〈上〉）。(23)の異文は笹野本が和歌とまったく同型だが、常磐松文庫本の方に歌謡としての独自性を認め得る。どちらが本来の形かは判断不能。

【恨恋しやうらみし程はきし物を】5オ――21番歌

(25)恋しや―こひしや　(26)程―ほと　(27)きし物を―来しものを

＊恋の恨みの歌で、閨怨のイメージから次歌へと連想する構成か。

【月になきそろあの野に鹿かたゝ一声】5ウ――28番歌

＊笹野本とまったく同型。本書独自の歌謡。妻恋いの歌として前歌と対照をなすとともに、後の二首とあわせて一人寝を主題とする歌でもある。

【ひとりねしものうやなふたりね寝初てうやなひとりね】6オ――33番歌

(28)もの―物

【思ひきりしに又見てよの中〳〵つらきは人の俤】6ウ――36番歌

(29)見て―ミて　(30)俤―おもかけ

＊本書独自の歌謡。

【衣〳〵のまくら（枕）にはら〳〵ほろ〳〵と別を慕ハ泪よの〳〵】7オ・ウ——40番歌

(31)まくら（7丁裏の分は「枕」）—枕　(32)慕ハ—したふ　(33)泪—なみた

＊常磐松文庫本重出歌。笹野氏の翻刻以来、笹野本40番歌冒頭句を「むく(椋)の枕」とするが、「衣」字の草体を「む」、重点を「く」と誤読したもので、常磐松文庫本を参照するまでもなく、「衣〳〵の枕」とするのが正しい。常磐松文庫本の本歌語の重出は、次章に詳述するごとく、該本がこの歌を重出させた系統の本の写しであることを示すものとは考えられず、該本書写者の誤記と解すべきもののようである。一丁の表裏にそれがあることも、右の想定と矛盾しない。7オと7ウとでは、まくら—枕、尓—耳、本呂〳〵—本路〳〵、よ乃—よの、と文学遣が相違し、散らし書きの書式も大異する（影印参照）。右の想定をふまえる限り、親本の文字遣に対する該本筆者の忠実さの程度を知る上での好資料たりうる事例といえ、又、散らし書きが該本筆者によって独自にとられた書式であったことをも示すものともみなしえよう。

類歌は『閑吟集』182番歌などに見えるが、まったく同型の歌謡は他に見えない。(32)の異文は、「は」を伴なう常磐松文庫本が自然であり、笹野本の誤脱とも考えられる。本歌は後朝の歌で、以下、閨怨の歌と後朝の歌とが数首ずつ置かれる。

【あはせけむひとこそうけれたきものゝ独ふせこにくゆる思を】8オ——31番歌

(34)けむ—けん　(35)ひと—人　(36)たきもの—焼もの

＊以下三首、閨怨の歌であろう。

【松に垣ほの八重葎かゝる仮にもすまるゝ欤】8ウ——48番歌

(37)松に垣ほ—奈にかきほ　(38)仮—所　(39)欤—か

＊上句から判断してこれも荒れはてた空閨をかこつ歌であろう。(38)の異文、常磐松文庫本の「仮」では意味が通らず、『隆達小歌』所収の継承歌にも「所」とある。「所」の草体を誤写したのが常磐松文庫本の「仮」であると思われ、笹野本の形が本来であろう。

【人の情のありし時なとひとりねをならハさるらむ】9オ——34番歌

(40)情—なさけ　(41)ひとりね—独ね　(42)らむ—らう

＊(42)は、『閑吟集』199番歌や『隆達小歌』所収の同型歌では「らん」とあり、常磐松文庫本の形が正統と考えうるが、この程度の相異は実際の歌唱の上では容易に起こりうるであろう。むしろ小歌の流動の相が両本の比較から知られる一例とすべきか。

【かへる後影を見むとしたれば霧かの朝きりか】9ウ――第29番歌
(43)後影―うしろかけ　(44)見む―ミん　(45)朝きり―あさきり
＊類歌は多いがまったくの同型歌は他にない。次歌とともに後朝の名残りが主題。
【袖を扣てまたよといへは涙にかきくれてとも角も】10ウ――30番歌
(46)扣て―ひかへて　(47)またよ―又よ　(48)涙―泪　(49)とも角も―ともかくも
＊本書に独自の歌謡。
【笹野本の序文との異同】
＜12オ＞(50)爰に―こゝに　(51)戸ほそ―とほそ　(52)閉て―とちて　(53)小うた―こうた　(54)詠つゝ―うたひつゝ　(55)高き―たかき　(56)ましわり―ましハリ　(57)賤き―いやしき　(58)伴ひ―友なひ　(59)若―わかき
＜12ウ＞(60)云―いふ　(61)古き新き―ふるきあたらしき　(62)小哥―こうた　(63)付て―つけて　(64)世ゝ―よゝ　(65)翫―もてあそひ　(66)疎か―をろか　(67)至る―いたる　(68)覚侍りし―覚えはへりし
＜13オ＞(69)皆―ミな　(70)郭―ほとゝきす　(71)慕ゐ―したひ　(72)鶯―うくひす　(73)谷の古巣―たにのふるす　(74)はつ音―初音　(75)心地―心ち　(76)望―のそミ　(77)はな鳥―はなとり　(78)頭し―あらハし　(79)風其―風月の　(80)影―かけ　(81)よつて―よせて　(82)猶―なを
＜13ウ＞(83)貧長―天なかく　(84)莚―むしろ　(85)謡物―うたひもの　(86)絶―たふる　(87)なからむ―なからん
＜笹野本のみにあって常磐松文庫本にない序の前半＞
千早振神代はもしのかすさたまらす／人の世となりて三そち一もしの哥にさためし／より此かた吾国の風俗として花になく鶯／水にすむかはつまても哥をなんさへつりあ／へりしかはあれと此道にたへさる人ハ六儀／十躰のすかたをわきまへす耳とをにきゝしる／事もかたくそ有けるちかき比小哥とて乱／舞遊宴にたはふるゝ折〳〵伊せこまちか／うたのことはをかり白楽阮藉か句をぬきて／はかせをつけうたひ物になしたけきものゝふの／心をもやハらけをんあい恋慕の道のたより／ともし侍りける（以下常磐松文庫本12オ冒頭に接続する形）
＊笹野本に序として巻頭に記される一文の後半（右に掲げた部分に接続）のみを、常磐松文庫本では巻末に白紙一丁を隔てて付載する形である。内容的には跋文というよりは序と考えてしかるべきであり、やはり一巻の冒頭にあるのが正しい位置であろう。

全体が『古今集』仮名序のパロディーとして首尾一貫していることからも、笹野本の序の位置と内容がその本来の形を伝えたものと考えてよかろう。仮名序よりの引用はとくに前掲の前半部分に顕著であり、後半の冒頭は「ここに桑門の戸ぼそを閉て」云々とあって、「ここに一人の桑門あり」で始まる『閑吟集』の仮名序の影響を見ることも可能であるが、それだけでは、例えば本書序文の前半と後半とが本来は別個の文章であったなどといった想像をなすことはできまい。和歌の起源→小歌の起源→宗安の紹介と宗安小歌節の隆盛→小歌の長久ならんことの祝言、と『古今集』仮名序の構想を全体にふまえた一貫性のある笹野本の序に対し、後半に相当する部分のみの常盤松文庫本の〝序〟は、首尾対応しない中途半端な内容であり、後半のみを抄写した付録的なものと考えてよかろう。

12ウ5行目「なつかしせられたる」は笹野本と共通し、従来は「なつかしう（又は「く」）せられたる」の誤写かと考えられていた。筆勢上は確かにこうした誤脱のおこりやすい部分ではあるが、有庵がこの序文の執筆者でもあるからには、常盤松文庫本と笹野本とが同一の親本にもとづき、しかもその親本こそが有庵自筆本であるという場合を除いては、両本の序文における誤写の共通ということはおこりえぬ現象であろう。なお、常盤松文庫本が笹野本に直接もとづく抄写本ではないことは、今までの両本の異同のあり方からみて明らかである。こうした異文のうち、1ウ(4)(5)、3ウ(14)(15)、4ウ(23)、7オウ(32)、9オ(42)は、両者が親子関係にはないことを示すばかりか、兄弟関係にすらないとの想像をも可能にする事例をも含むとの見方もできよう。一方、「なつかしせられたる」を、「う」又は「く」の誤脱ではなく、「なつかしみせられたる」の撥音便形「なつかしんぜられたる」から、撥音表記の省略せられたものとの解釈も不可能ではあるまい。むしろ該部分の解釈としては、こちらの方がはるかに合理的であり、「う」又は「く」の誤脱とする立場はとらぬこととしたい。

13オ(79)(80)(81)「風其影によつて」は、該本独自の誤写と認めうる。すなわち、「風其」は、「風月」を「フゲッ（ッ入声）」と発音したために「風玄」と表記した本文にもとづき、「風玄の」を「風其の」と誤読して「風其」と表記したものであろう。常盤松文庫本の癖の強い筆跡や宛字の多用の例からすると、該本自体が「玄」のつもりで書いていることも考えられるが、そう読むのはやや無理を感ずる。(81)「よつて」は、(79)を「風其」と記したことに導かれての意改かも知れないが、該本に原文意改の明らかな例が他にないことを考えあわせると、「よせて」の誤写又は「寄て」の誤読とみた方がよかろう。

*　*　*　*

常盤松文庫本と笹野本の該本に重複する部分との異同のあり方は、異同の甚しい順に、大別して次の四種になる。

A　草仮名の字母の異同
B　漢字・仮名の使い分けの異同
C　音韻表記上の仮名遣の異同
D　語句の異同

Aについては、笹野本との異同自体からはとくに注意すべき特徴的事例を指摘することができない。しかしながら、第7丁の重出歌相互の使用字母・書式の相違（既述）や、Bで後述する該本の文字遣の特色との関連から、該本がその親本の文字遣や書式を無視して、独自の立場から字母を選択し、書式を決定したであろうことが想像される。つまり書写者は意図的に散らし書き形式をとり、自由な文字遣で親本を書写したのであろうと思われる。

Bについては、笹野本では仮名書きになっている部分を該本では漢字を用いる例が圧倒的に多い。13オ(70)の「郭」は「鳥」の字を誤脱した可能性すら考えうるし、13ウ(83)の「奠長」を天ナガクと訓ませるのもかなり無理である。13オ(79)「風其」が「風玄」のつもりで書いたものとすれば、やはり不相応な宛字の例となろう。3ウ(15)「六借」、10ウ(46)「扣て」、12オ(54)「詠つゝ」なども、該本が宛字や異体字を好み用いることを示す例である。その大半は必ずしも特殊な用字とはいえないが、散らし書きという草仮名により相応するであろうような書式をとることに反して、好んで漢字を用いるのが、該本の用字法の特色と考えてよかろう。断言はできないが、こうした傾向は該本の書写者の好みを反映している可能性が強いように思われる。

Cについては、特色といえるほどの事例はなく、親本にどこまで忠実であるのかも判断できない。

Dについては、該本独自の誤写はあるものの、明らかな意改の形跡は皆無とみなしてよかろう。文字遣についてはかなりの改変を加えながらも、本文自体はその親本のままに書写していると考えておく。語句に関する異文のすべてが笹野本の誤写を補訂しうる類いのものではないにせよ、『宗安小歌集』伝承の過程における小歌の流動の相について、かなり具体的な材料のいくつかを、該本が提供できるのではなかろうか。笹野本との系統関係は次章に述べるが、Dに分類さるべき異文の数々を見ただけでも、該本が笹野本からの抄写本でないことも確実視されよう。

常盤松文庫本『宗安小歌集』十九首は、うち一首が重出し、かつその配列は笹野本のそれと大異する独自の構成を備えたものであった。すなわち、笹野本二二一首の前半四分の一にあたる第2番歌以下第51番歌までの中の十八首と、該本の十九首とが共通するわけである。又、序文の後半のみが巻末に付載されるという不審な形式をもあわせ持っていた。該本は、いかなる形態の本から

の写しなのであろうか。又、それは笹野本といかなる関係にあるのであろうか。

四　常磐松文庫本の性格

【笹野本について】

笹野本は、自ら序文を執筆して宗安に与えた久我有庵が、序文以下二二一首の小歌を書写し、さらに奥書を加えた、いわば再写本系統の本文である。序以下奥書にいたるまでの全文が、影印によれば同筆と認めうるし、紙継ぎ部分にも本文が書かれ、奥書に署名と花押とを記す笹野本が、有庵自筆の浄書本であることは、ほとんど動かしがたいようにも見える。しかしながら、有庵自筆の浄書本であるにしては、笹野本には不審な誤写が多くあるようである。59番歌の見せ消ちや194番歌の誤写の訂正（墨色が異なるが本文と同筆のようにも思われる）はとくに不審とはいえぬかも知れぬが、197番歌は誤写の可能性が強い（北川氏「私註」〈下〉）にもかかわらず何らの訂正もなされておらず、又、96番歌

あちき花のもとに君としつとゝ手枕入て月をなかみようなおもひハあらし

の「あちき」は「あはれ」（安ハ連・安者連）の誤写であることが確実である。108番歌の「なよなまくらうなよまくら」の「う」も、先行の『閑吟集』178番歌のごとく「よ」とあったのが誤写されたことが考えられぬこともない。194番歌「おれハ明年十四になるしにかせうすらうあちきなや」云々とある部分は、浅野氏注のごとく「十四」から「死」を連想したものと解しても、「か」（カ）の補入は不審であり、「に」と「せ」の間に文字（例えば「も」など）を補入しようとしてそのままに放置されたものとも考えられよう。40番歌で「したふ」の次に「は」を脱した可能性や、常磐松文庫本とのその他の重複歌の一部に、笹野本の誤写を正しうる事例もあることは、前章に既述した。

以上の例は、浄書本である笹野本に必ずしも全幅の信頼を置きがたいことの事例であるが、小歌集に序を付すほどに編者と昵懇で、小歌に無知又は無関心ではなかったろう人物が、自ら「騎竹の年に与へんが為」（笹野本有庵奥書）にその小歌集を写すに際しての誤写にしては、やや不審ではある。判読不能な点は宗安自身にただしうる立場にあったであろうし、「あはれ」を「あちき」とするような機械的な誤写の生ずる可能性は、皆無とはいえぬもののそれ程多くはないのではなかろうか。すなわち、断言はできぬものの、笹野本が有庵自筆の本ではなく、有庵の署名・花押までを摸したその転写本である可能性も、念頭に置くべきでは

あるまいか。右の考え方を証拠立てるべき材料を他に確認しえたわけではないので、ここに一応の問題提起をするにとどめたい。

【常磐松文庫本の形態上の問題点】

常磐松文庫本『宗安小歌集』墨付第7丁に笹野本40番歌の歌謡が重出することの意味を考察する。笹野本にも133番歌と202番歌、147番歌と187番歌の二例の重出があるから、常磐松文庫本が笹野本40番歌に相当する歌謡を重出する系統の本からの写しである場合と、常磐松文庫本独自の重出である場合との両様が考えられるが、重出歌をあえて抄出するとは思えず後者の可能性がより強い。

常磐松文庫本の製本の仕方をみるに、冒頭のあそび紙と墨付第9丁とが一枚の料紙の半折で、以下第1丁と第8丁、第2丁と第7丁、第3丁と第6丁、第4丁と第5丁の各丁が一枚の料紙の半折として前半の一帖を構成する。後半の一帖は、白丁である第11丁と最末のあそび紙とが小豆色料紙の半折、第12丁と巻末のあそび紙第2丁、第13丁とあそび紙第1丁とが、それぞれ一枚の料紙の半折である。ところが第11丁の前に、半分に裁断された第10丁が貼付され（裏表紙綴じ代にのり付け）、都合全17丁、墨付第1丁から第10丁までのうち第10丁表を除く各頁に小歌一首が書かれ、小豆色の白丁を隔てて第12・13丁に序の後半が書かれている。この装丁から考えて、墨付第10丁の存在はいかにも余計であり、その原因は第7丁両面における小歌の重出にあるのではないかと思われる。すなわち前半の帖の冒頭をあそび紙とし、以下九丁に十八首を写して一まとまりとなし、後半の帖の冒頭に色替り料紙の白丁を置き、序文のみで一まとまりとなすはずであったのが、誤まって第7丁裏に表と同じ小歌を書き、全体の構成に支障をきたさぬ形で料紙の不足を補うべく、墨付第9丁の後、第11丁の前に半切した料紙を貼付して第10丁とし、第19首目（実は18首目）を写したのであろう。第19首目が第10丁表を白紙のままに裏頁に記されたのは、次丁見開き両面が白紙になってしまうことを避けた措置と考えられ、それは又、常磐松文庫本が十八首のみを抄録することを目的として書写された本であること——換言すれば、該本の親本がすでに十八首の抄出本であったこと（親本に重出歌を想定するのは両本が同形態の場合を除き不自然）をも示唆していよう。十九首以上を収める本を底本としていれば、第10丁表が白紙のまま放置されることはなかったであろうからである。

ところで、常磐松文庫本所収の十九首は、前章に略記したごとく、ある特定の主題ごとに構成されていた。該本の配列順にその構成を再見すると次のごとくである。

恋の浮名（1オ＝52、1ウ＝42）・旅寝（2オ＝32）と待つ恋（2ウ＝26）・叶わぬ恋（3オ＝27、3ウ＝2）・恋の恨み（4オ＝6、4ウ＝18、5オ＝21）・一人寝（5ウ＝28、6オ＝33、6ウ＝36）・後朝（7オ＝40、7ウ＝40）・閨怨（8オ＝31、8ウ＝48、9オ＝34）・後朝（9ウ＝29、10ウ＝30）

すなわち、比較的まとまった主題ごとにはじめは二首ずつ各丁の表裏に記す形式を基本とし、同題の歌が見開き両面にならぶことのないように配慮されてもいる（第10丁オの白頁はこれとも関連するかも知れない）。後半で、一人寝の歌六首（閨怨も一人寝とみる）の間に後朝の歌一首が重出するが、恋の恨み以降三首ずつ一まとまりとするつもりで、一人寝六首の間に後朝三首を配置するはずであったのが、誤写による重出の結果、このような構成となったものであろう。

しかしながら、前半六首分が二首ずつ、後半十二首分が三首ずつという配列は、旅寝と待つ恋がはたして対をなしうるのか否か、一人寝と閨怨との各歌相互に主題上の本質的相違があるのか否か、等々の疑問を起こさせる便宜的印象の強い構成であり、これらの歌が本来こうした構成の下に配列されていたとは必ずしも信じがたいようである。もともと十八首しかないバラバラの歌群を強引に主題別に再構成しようとした無理が、旅寝の歌と待つ恋とを結びつけるなどの結果を招来したのではなかろうか。誤写による重出が十八首の配列のあり方に若干の変化をもたらしたらしいこと、それが該本の製本のあり方とも一体の関係にあるらしいことなども、この小歌の構成が該本書写者独自の工夫によるものであることを示すものといえよう。

【常盤松文庫本の祖本】

常盤松文庫本『宗安小歌集』が、いかなる形態の祖本からの、いかなる抄出の仕方をした本にもとづくのかにつき、考察する。

常盤松文庫本の親本の性格については、基本的には次の両様が考えられる。

〔Ⅰ〕 笹野本とほぼ同規模・同配列の別本からの恣意的な抄出本である場合。

〔Ⅱ〕 笹野本とは規模・構成の異なる祖本からの恣意的な抄出又は断簡。

該本の重出歌を除く十八首の中の九首が、笹野本では互いに連続しない位置にあること、十八首の選択基準に一貫したものが認められぬこと、序の後半のみが、巻頭ではなく巻末に記されること、所収歌数の少ないことなどが、〔Ⅱ〕の、とくに断簡の写しが常盤松文庫本の親本であるとする想定を支持するかに見える。しかしながら、右の十八首のすべてが笹野本の前半四分の一に相当する部分の中に存在しており、バラバラの第2・6・18・21番歌や36・40・42・48・51番歌以外の九首は、笹野本では第26～34番歌の九首に一致することから、常盤松文庫本の祖本が笹野本とその構成の大異する本であったと考えるのは無理であろう。笹野本と同じ構成の祖本を想定する場合には、番号の連続しない九首の存在から、錯簡や断簡の可能性を考えるわけにはいくまい。もと色紙形に書かれたものの一部などと考えるには、序文の存在が障害となろう。序文の位置とその分量とは、常盤松文庫本の親本に落丁又は錯簡等のあったことを示すかに見えるが、十九首という小歌の総数からは、冒頭よりも巻末に置いた方が均衡がとれるであ

ろうし、又、最末の色替りのあそび紙一丁の他になお二丁の余白を序の後に残す該本の体裁からは、本来は序の全体を写すつもりであった（従って親本には序文が完備していた）のを、何らかの事情により後半のみを写すにとどめた場合すら想定不可能ではない。該本の序が本来の形からの脱落か抄写か、又、何故この十八首のみを抄出したのかといった未解決の問題は残るのであるが、現段階では、〔I〕のごとく笹野本とほぼ同規模・同配列の祖本（別本）からの恣意的な抄写本を親本として、常盤松文庫本が書写されたと考える他はあるまい。その親本自体は、十八首を笹野本の配列に準じた、2・6・18・21・26～34・36・40・42・48・51番歌（該本では3ウ・4オ・4ウ・5オ・2ウ・3オ・5ウ・9ウ・10ウ・8オ・2オ・6オ・9オ・6ウ・7オ・1ウ・8ウ・1オ）の順にならべていたのであろう。

常盤松文庫本は所収歌数が少なく、したがって笹野本との具体的な系統関係を想定することは困難である。両本の異同が一方が他方の誤写を訂正しうるものばかりではなく、当時の小歌の流動の反映とも考えうるものをも含んでいること、そうした異同が両本が成立する以前の段階で生じたものであるらしいこと等々から、両本は、規模や構成をほぼ同じくする二種の祖本をそれぞれに書写した別系本ということになるであろうが、それらの原本はすでに序文を備えたものであったはずであり、結局は同一の原本から派生した両系統の祖本の一方又は双方が、書写の過程で当時の流行歌謡の実情に応じて部分的に改変を加えたか、又は単純な誤写を重ねたかして異文を生じたものなのであろう。いずれにせよ、常盤松文庫本は笹野本に直接もとづく転写本ではないだけに、『宗安小歌集』の現存唯一の完本たる笹野本を補訂し得るのみならず、笹野本の性格を考える上でも重要な材料を提供する可能性をも備えた新資料であることが、確信されるのである。

五　影印と翻刻

【凡例】

一、本学常盤松文庫蔵『宗安小歌集』の全文を影印・翻刻する。上段に影印、下段にそれに対応する翻刻を収める。

一、影印にあたり、白紙の分はこれをすべて省略する。省略したのは冒頭のあそび紙・第10丁表・第11丁・巻末のあそび紙三丁の計四丁半である。

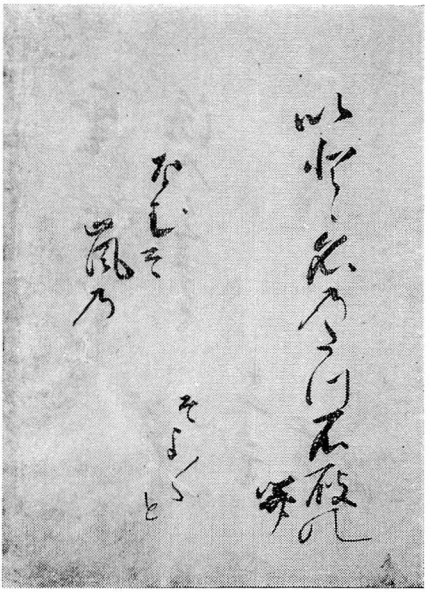
一、丁数は墨付第1丁より起算し、白紙の第11丁をも数えて第13丁までとする。各丁数は1オ・1ウなどの形で表裏の別を注し、

翻刻部分の下に記す。

一、翻刻にあたり、字配り等は原本に準じ、句読点・濁点等は一切加えていない。

一、文字遣は、楷書体の変体仮名は草書体のそれに準じて通行の平仮名に改め、漢字の異体字は「宖」「荣」の二例を「爰」「桑」と改めた他は原文のままとし、その他の漢字は新字体に統一した。

一、明らかな誤写と認めうる部分のみにつき、翻刻本文の右側に（ママ）と傍注した。

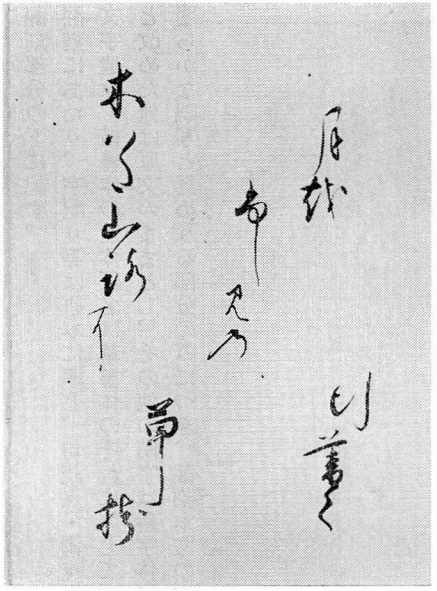


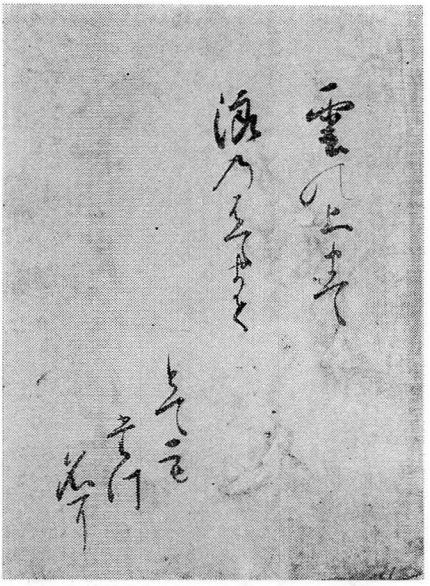
いと、名のたつ不破の関

なむそ　そよ〳〵と

嵐の

（1　オ）



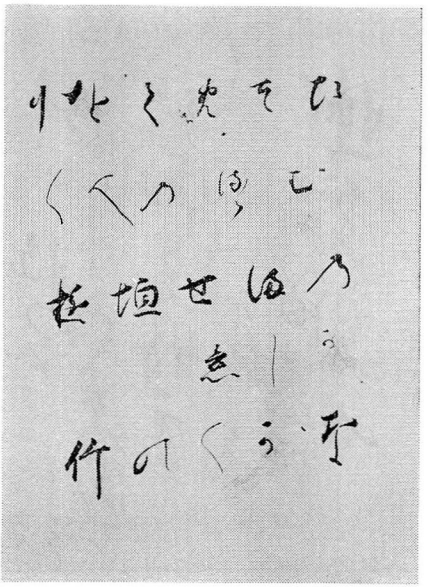


雲の上まで
浪のはてまで
とても
たつ
名に

（1　ウ）

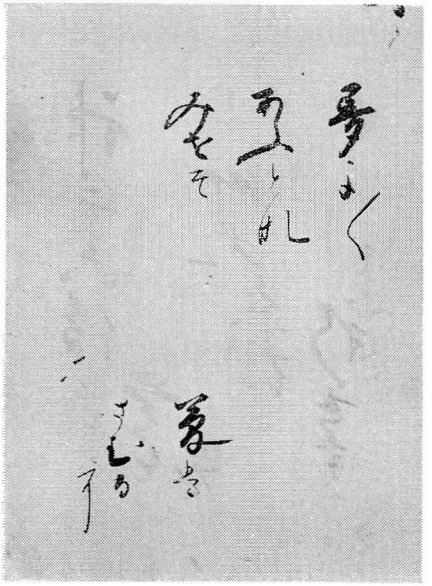
月を
ふし
見の
草
枕
行
暮て
木ハた山路に

（2　オ）



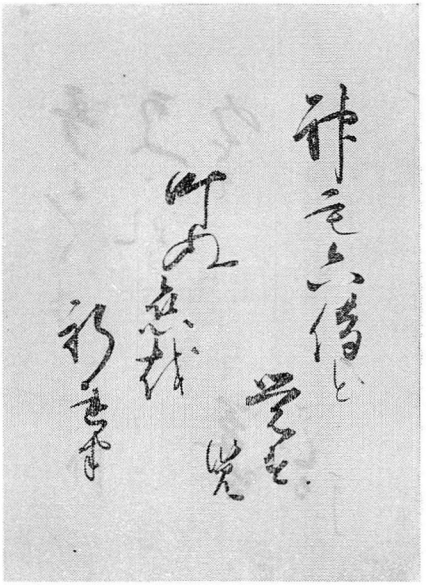
ひそめてをりむらの
人の垣せまの
ゆ　恋しかな
竹の〳〵

（2　ウ）



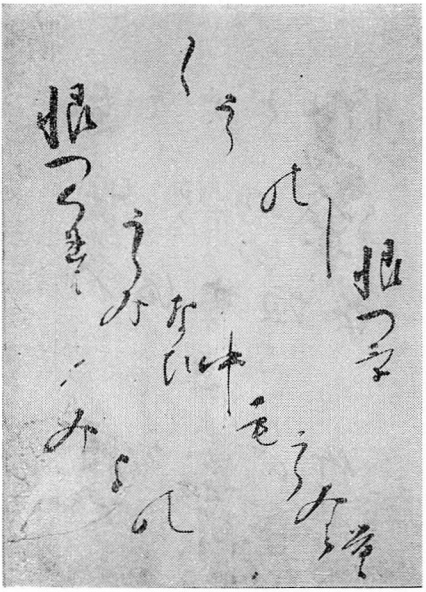
夢よ〳〵
あふとな
みせそ
夢は
さむるに

（3　オ）



神も六借と
覚す
叶ぬ恋を
祈れは
覧

（3　ウ）

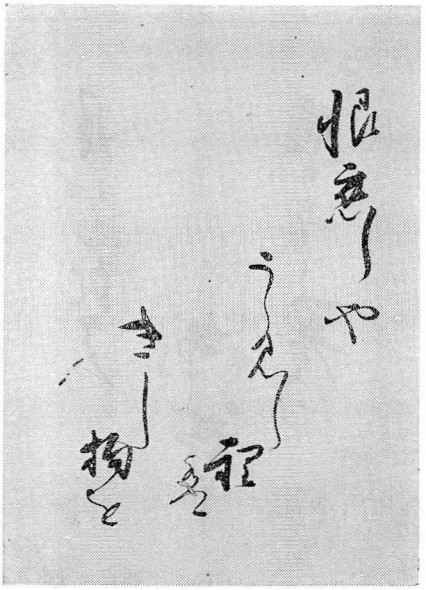


恨つけ
る、
し
みら
の
うら
も
うら
中
く
なひ
の
うらみ
よ
恨つくれは
み

（4　オ）

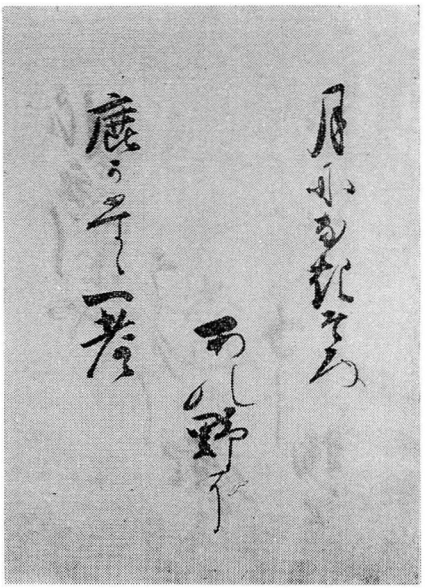
うらみ
しの田のもり
よ
葛の葉

（4　ウ）



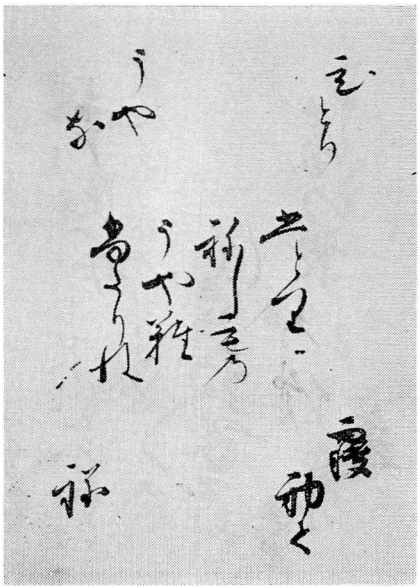
恨恋しや
うらみし程は
きし物を

（5　オ）



月になきそろ
あの野に
鹿かたゝ一声

（5　ウ）



ひとり
ひとり　寝初て
ねしもの
うやな
ふたりね
うや
な
ね

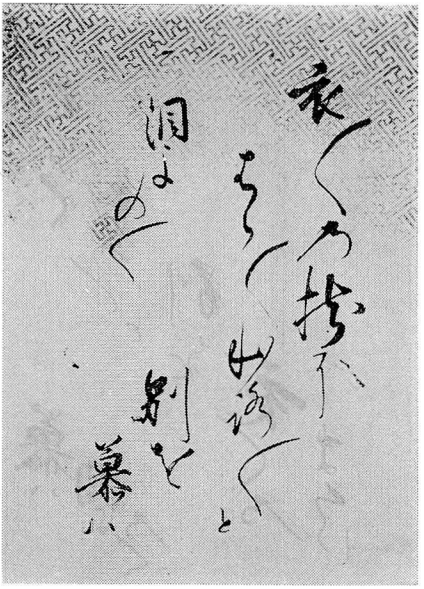
（6　オ）

思ひきりしに又
見てよの中〳〵
つらきは
人の俤

（6　ウ）

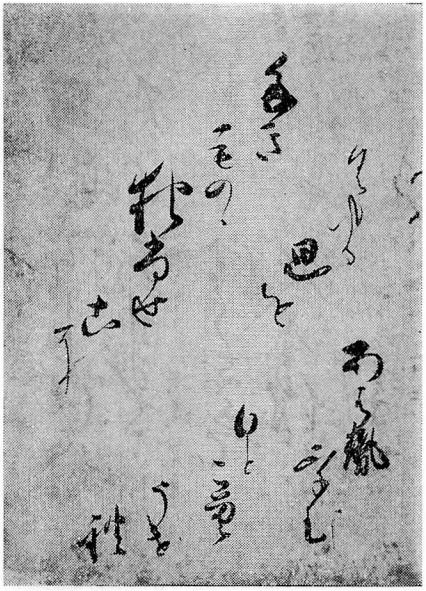
はら〳〵
ほろ〳〵
と
別を
衣〳〵の
まくらに
慕ハ
泪よ
の〳〵

（7　オ）



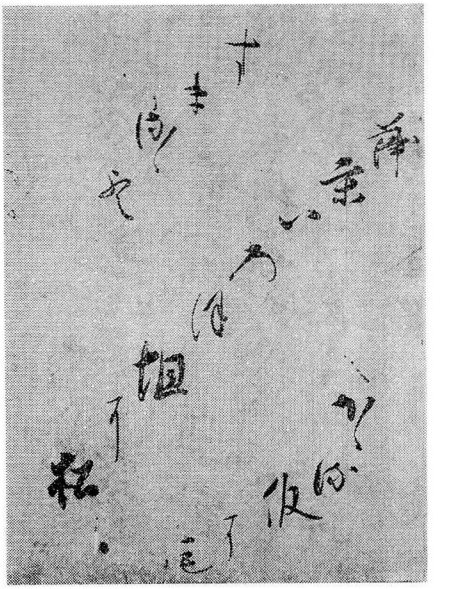
衣〳〵の枕に
はら〳〵ほろ〳〵と
泪よ
の〳〵
別を
慕ハ

（7　ウ）



くゆる　あはせ
思　けむ
たき　を
もの、　ひと
独ふせ　こそ
こ　うけ
に　れ

（8　オ）

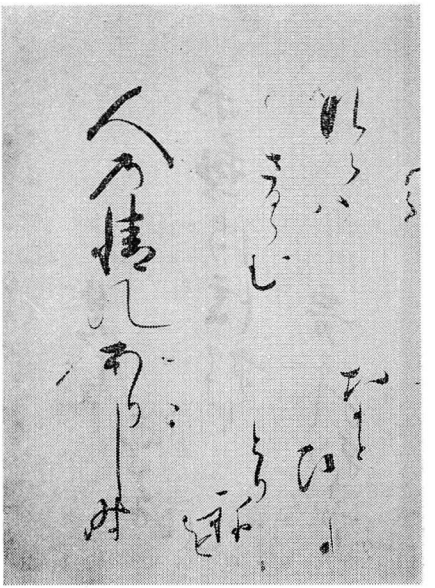


葎
重
八
の
ほ
垣
に
松

す
ま
る、
欤

かゝる
仮
に
も

（8　ウ）

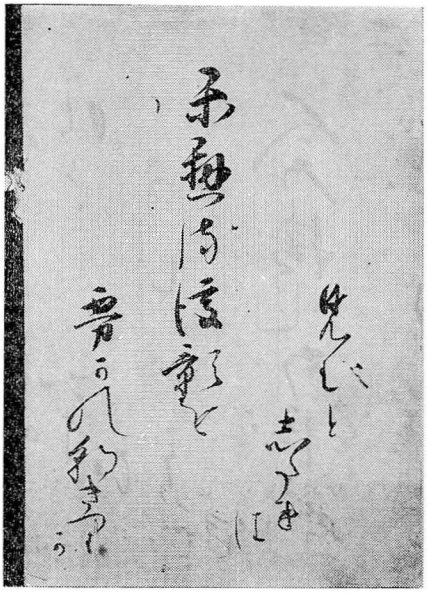


ならハ
さるらむ
とり
ねを

なと
ひ

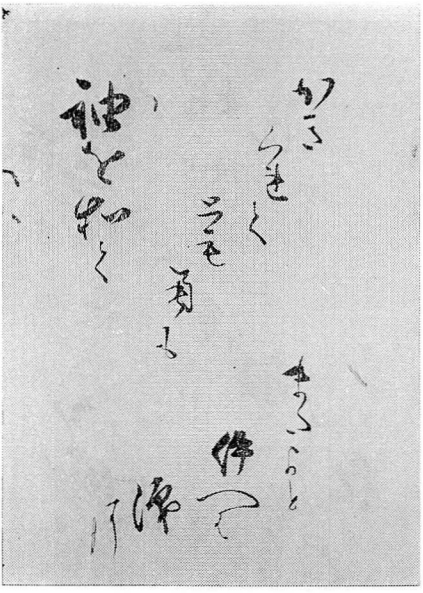
人の情のありし時

（9　オ）



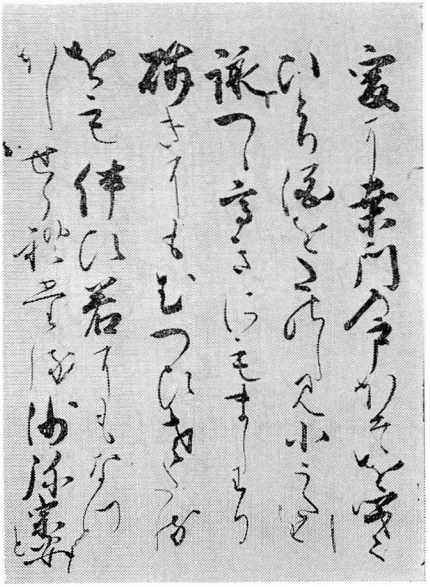
見むと
したれ
かへる後影を
霧かの朝きり
は
か

（9　ウ）



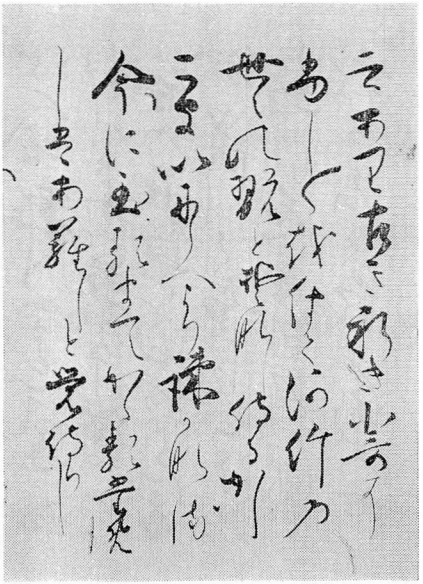
かき
くれて
とも
角も
袖を扣て
またよと
いへは
涙
に

（10　ウ）



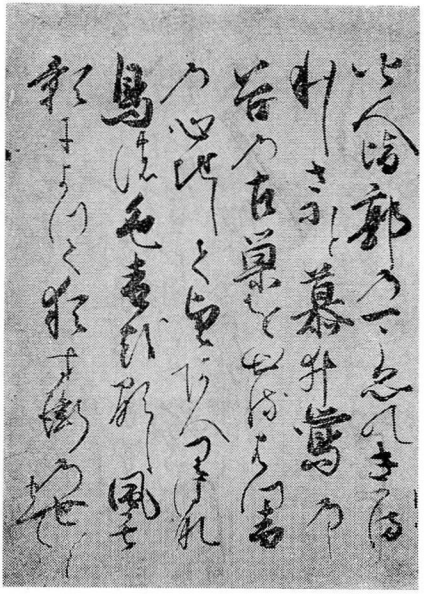
爰に桑門の戸ほそを閉て
ひとり酒をたのしみ小うたを
詠つゝ高きにもましわり
賤きにもむつひ老たる
をも伴ひ若にもなつ
かしせられたる沙弥宗安と

（12　オ）



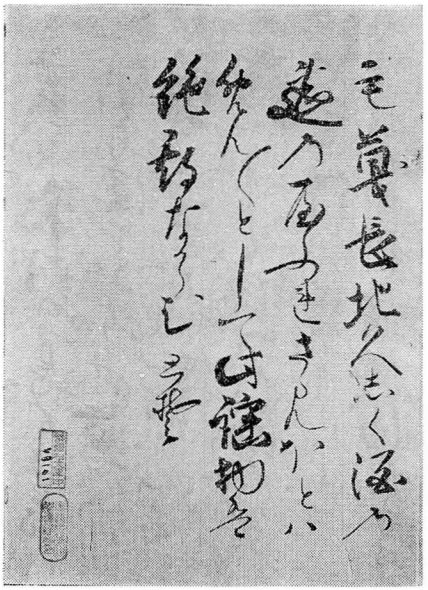
云あり古き新き小哥に
ふし〳〵を付て河竹の
世〻の翫とそなし侍るかし
こきいにしへより疎かなる
今に至るまてかゝるため
しはあらしと覚侍りし

（12　ウ）



聞人皆郭の一こゑのきかま
ほしさにと慕ね鶯の
谷の古巣を出るはつ音
の心地して望あへりはな
鳥の色音を顕し風其
影によつて猶するゑの世まて

（13　オ）



も奠長地久しく酒の
莚のやふれさらんほとハ
めん〳〵として此謡物は
絶期なからむとそ

（13　ウ）